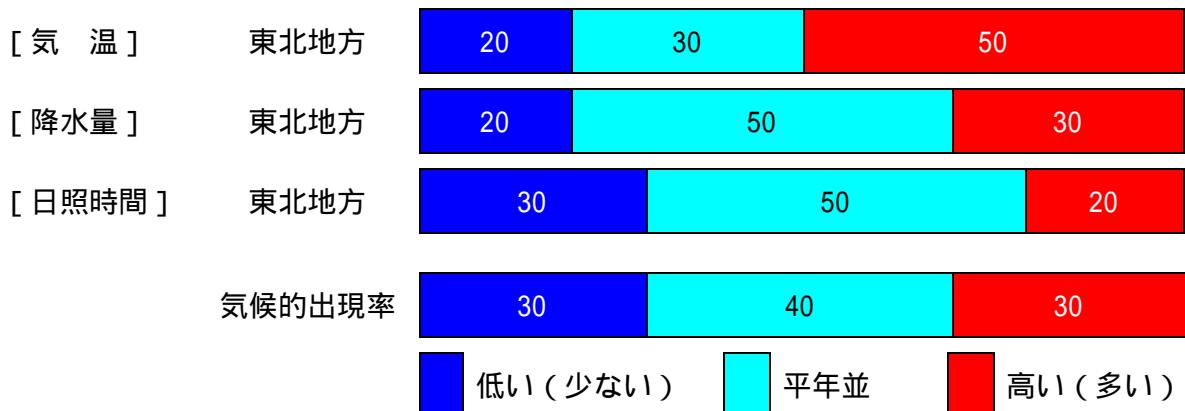


東北地方 1 か月予報の解説(予報期間:6月19日~7月18日)

平成11年6月18日 仙台管区気象台

1. 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)



- [気温]: 東北地方は「高い」可能性が大きく、その確率は50%です。次に大きい確率は「平年並」で30%です。「低い」率は20%と小さい。
- [降水量]: 東北地方は「平年並」の可能性が大きく、その確率は50%です。次に大きい確率は「多い」で30%です。「少ない」確率は20%と小さい。
- [日照時間]: 東北地方は「平年並」の可能性が大きく、その確率は50%です。次に大きい確率は、「少ない」で30%です。「多い」確率は20%と小さい。

2. 予想される天候の特徴(もっとも高い確率の予報が実現した場合の天候は以下の通りです。)

向こう1か月

梅雨前線や低気圧の影響で、平年同様曇りや雨の日が多いでしょう。

平均気温は「高い」でしょう。

各予報期間の天候の特徴

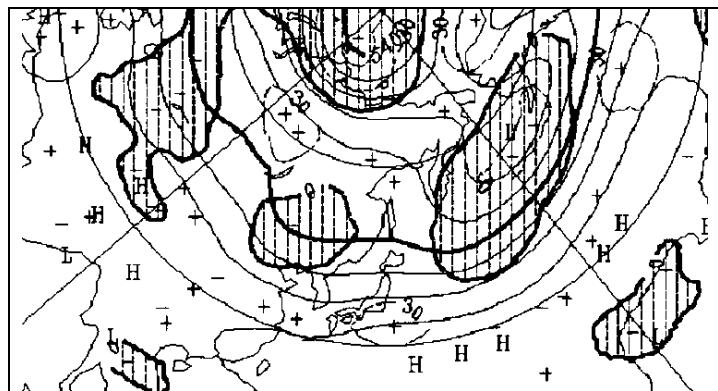
1週目…………… 東北南部では梅雨前線や低気圧の影響で天気はぐずつくでしょう。東北北部(6月19日~6月25日)では、高気圧に覆われ曇りまたは晴れで経過するでしょう。平均気温は平年並の見込みです。

(詳細は週間天気予報を参照)

2週目…………… 低気圧や高気圧が交互に通り天気は周期的に変わるでしょう。
(6月26日~7月2日) 平均気温は高い見込みです。

3~4週目…………… 梅雨前線や低気圧の影響で、平年同様曇りや雨の日が多いでしょう。
(7月3日~7月16日) 平均気温は高い見込みです。

予想される天候に関する循環場の特徴（アンサンブル平均天気図）

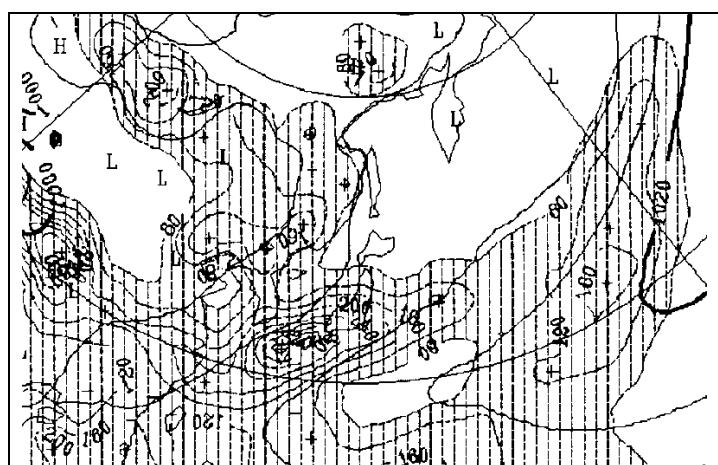


月平均の 500hPa 高度・偏差
(等高度: 60m 毎、偏差: 30m 毎、陰影部: 負偏差)

・500hPa 高度・偏差

月平均では日本付近は広く正偏差に覆われている。太平洋高気圧は平年に比べ強い。日本付近はやや西谷だがゾーナルな流れ、オホーツク海付近に弱い正偏差が見られるが、はっきりした高気圧は見られない。

2週目（図略）は北日本は弱い負偏差。3～4週目（図略）は日本付近は広く正偏差となるが、信頼度は小さい。



月平均の地上気圧と降水量
(等圧線: 4hPa 毎、降水量: 40mm 毎、陰影部: 80mm 以上)

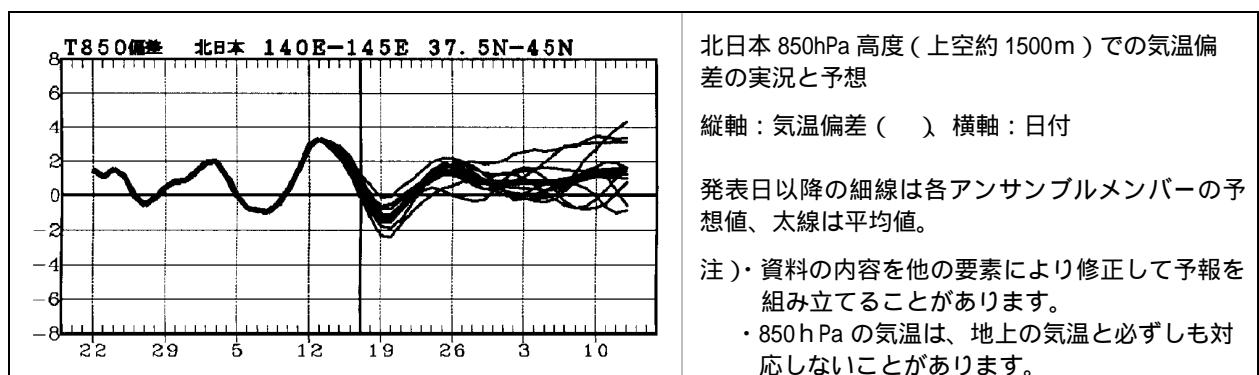
・地上気圧と降水量

月平均では、梅雨前線に対応して、日本の南岸にまとまった凝結域が見られる。降水域はやや日本海側で盛り上がり、前線の影響を受けやすくなる時期がある。

1～2週目（図略）の凝結域は日本の南岸が主体で東北地方は南部ほど影響を受けやすい。3～4週目（図略）は、東北地方にかかるまとまった凝結量が計算され、全般に影響を受けやすくなるが、信頼度は小さい。

3. 北日本 850hPa の気温偏差の実況と各アンサンブルメンバーの予想

北日本 850hPa の気温は、アンサンブルメンバーの平均でみると、一週目前半は平年より低いが、その後は平年並～高い。アンサンブルメンバー間のバラツキは後半やや大きくなるが、強い低温を予想するメンバーはない。

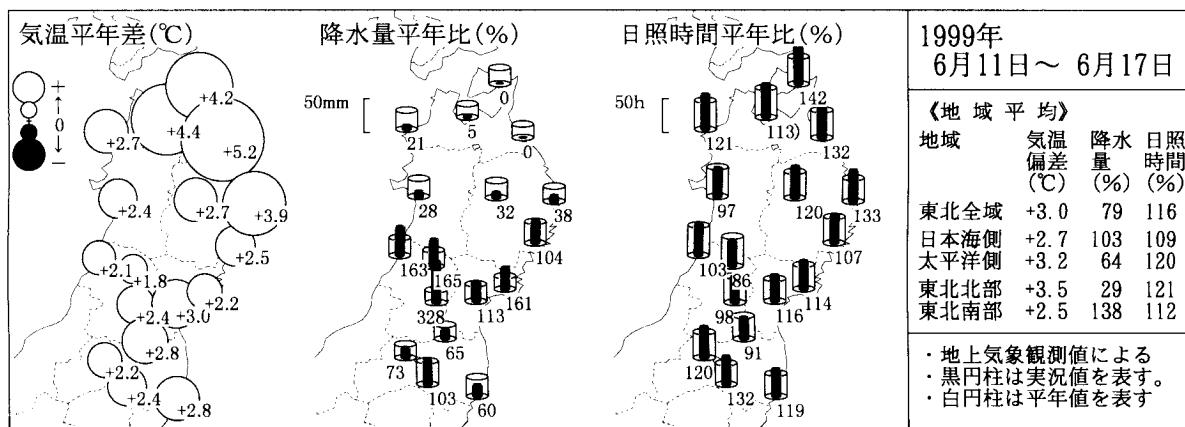


注：1か月予報では、よく似た初期値から出発した 10 個の数値予報結果のバラツキ具合から予報の信頼度や確率を計算します（この手法をアンサンブル予報といい、10 個の予報結果のそれぞれをアンサンブルメンバーといいます）。一般に予報結果がばらつかないほど、大気の流れが予測しやすい状態にあると考えられます。このような状態の時は、信頼度が高くなり、確率の大きな予報を出すことができます。

4. 最近1週間(6月11日~6月17日)の天候の経過

この期間、前半は高気圧に覆われ概ね晴れたが、11日は上空の寒気の影響で太平洋側南部では雨となった。後半は梅雨前線の影響で曇りや雨となった。

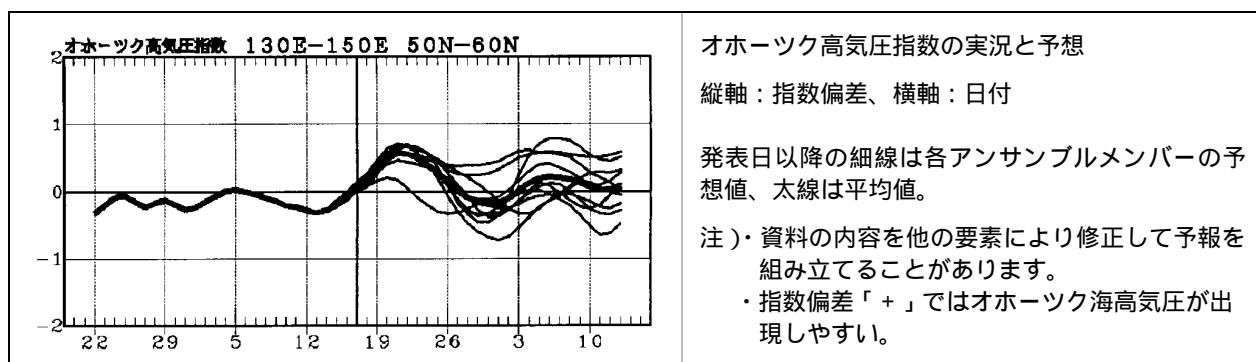
気温は平年より高く、降水量は平年より少なく、日照時間は平年より多い。



最近1週間の平均気温、降水量及び日照時間の平年差(比)

5. その他

オホーツク高気圧指数は、アンサンブルメンバーの平均でみると1週目は高いが、その後はほぼ平年並。しかし、後半はバラツキが大きく、信頼度は小さい。



梅雨入り梅雨明けの時期

	今年の梅雨入り	平年の梅雨入り	昨年の梅雨入り	平年の梅雨明け	昨年の梅雨明け
東北南部	6月7日頃	6月12日頃	6月3日頃	7月23日頃	特定しない
東北北部	6月7日頃	6月14日頃	6月3日頃	7月26日頃	特定しない